

## 編集後記

最近、特に金融のリーマン・ショック以降、「経済学の教育方針が大変であろう」と感じている。ミクロ経済学では、“「企業の目的」は利潤の最大化”が公理系になっている。この公理系で、生産される財を集約 (aggregate) して“供給関数”が導出される。しかし、いま「企業の目的が利潤の最大化で良いのだろうか」ということが問題視されている。また、「利潤」でも、短期と長期の違いも大きな問題になる。瞬間的な「利潤（儲け）」を最大化して多額の報酬を獲得して「後はサヨナラ」というような「企業目的」はモラル・ハザードである。「企業の目的は、社会貢献である」という経営者・評論家が最近多くなっているように感じる。

社会貢献の対価として利潤をもらっているのであり、企業の継続性を考えれば、国民に支持されないような企業は長続きしない  
ということが、その論旨のようである。この論法では、ミクロ経済学における「企業の目的」の公理系はどのようになるのであろうか。科学では、何を認めるか（理論の前提条件：公理系）を設定・明示しなければならない。そうでなければ「百家争鳴」の混乱が起こるのであろう。イデオロギーの対立になる。

また、需要関数の基礎になる消費者が望む「効用最大化」は、第一義的には「年収の最大化」として考えられる。限られた予算制約の下で自己の効用を最大にするような財の組み合わせを選択する。ところが、年間収入が1億円を超える人たちがいる。どんなに贅沢をしても「個人」では使い切れない金額である。このような「富裕層の人々」の「目的」は何なのだろうか。これに関して、最近耳にする話題は、『お金儲けは悪い事ですか』という質問である。巨大ファンドが短期に多額の利得を得るような事態は、私としては「さもしい行為」と思うけれど、「経済学」は「道徳」とは独立であるから、これらの「Greed 族」を「悪」であるとは言い切れない。「お金儲け」は善悪の問題ではなく、「好き嫌いの問題」である。改めて『お金儲けは好きですか』という問では、ほとんどの人が「好き」と答えるであろう。この状況を、江戸時代の浮世草子の作家、井原西鶴は次のように表現している。

＜人間は欲に手足のついたるものぞかし＞ あるいは ＜世に錢ほど面白きはなし＞

しかし、数億円という年収を得る人々がいる一方で、年収が数百万円という多数の人々がいるという現実には「市場の失敗」といえる問題ではなからうか。

さらに「富裕層」に対しては「収入の最大化」は意味薄弱になるのではなからうか。富裕層がほんのわずかな「我慢」をして、「貧困層」に富をまわすことで、国全体の GNH (General National Happiness) が大きく上昇すると思える。日本の貧困率は諸外国に比べて、かなり高い (14.9% : OECD 平均 10.6%、08 年度) というデータが最近発表された。

このように、特にミクロ経済学で教える「公理系」と、現実との段差を感じてしまう。経済理論は市場の『第一次近似』を表現すべきであると思うが、世の中は「効率性」を第一義にして動いているのであろうか。

以上は、“経済学がわかっていない”老数学者の妄言であり、“対岸の火事”を見物している野次馬の気分である。お聞き流していただければありがたい。

上智経済論集最近号目次  
(第54巻 第1・2号 合併号 2009年3月)

**論 文**

- Providing Public Infrastructure Competition and New Economic Geography ..... Hiroki Kondo (1)
- Emerging China's Economic Visions during the Five Year Plans and the Evolution of  
the Doctrine of "the Scientific Concept of Development"  
..... John Joseph Puthenkalam (29)
- インターネット上の口コミの有効性：  
製品の評価における非言語的の手がかりの効果 ..... 杉谷陽子 (47)
- 修士論文サマリー ..... (59)
- ディスカッション・ペーパー一覧表 ..... (76)
- 「上智経済論集」執筆要項 ..... (79)

上智経済論集 第55巻 第1・2号 合併号

編集委員長 津野 義道      編集委員 上山隆大、杉谷陽子

2010年3月1日印刷・発行

頒価 525円

発行所 上智大学経済学会

〒102-8554 東京都千代田区紀尾井町7-1

印刷所 (株)小葉印刷所

電話 03-3238-3201・3202